



桜ほころぶ
新発田城 三階櫓前にて



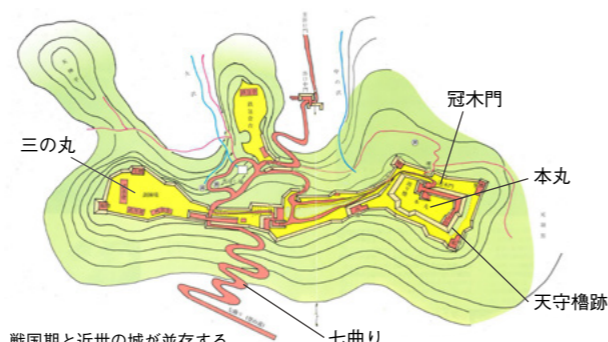
越後の城めぐり

今回は、戦国時代に活躍した上杉謙信ゆかりの土地である越後を訪れました。「義」の武将と称され、今も多くの人たちに愛されている上杉謙信。その生涯に大きく関わった栃尾城、村上城、新発田城を、小和田哲男先生の解説とともに2日にわたって巡りました。上杉家、越後の歴史、そして各城についての理解を深める研修となりました。

静岡大学名誉教授
小和田 哲男さん

【冠木門石垣の鏡石】

重要な城門の側に置かれた大きな岩は鏡石と呼ばれ、城に侵入しようとする兵を威嚇するねらいがあったとされています。大阪城の正面にあるものは遠くから運ばれたものと推定されていますが、今回訪れた村上城の鏡石は、もともとその地に存在した岩を使用したものと考えられています。



戦国期と近世の城が並存する村上城

【石垣の積み方】

石垣の積み方には、自然石をそのまま積み上げる野面積み、表面の石を叩き平たくして積み上げる打ち込みはぎ、方形に整形した石材を積み上げる切り込みはぎなど、さまざまな種類があります。なかでも石垣の出角部分は崩れやすく、特殊な積み方をすることが多い箇所になります。算木積みは、占いで使用される算木のように、長い石を互い違いに組み合わせて強度を上げるものです。天守台付近の石垣にも算木積みが見られます。



とした平山城です。村上城を本拠地として威勢を振るっていた本庄繁長と次第に対立を深めていった謙信は、永禄11(1568)年、軍を率いて進攻し、繁長は抵抗の末に降伏しました。この戦の舞台となったのが村上城でした。戦国時代というのは、既定の身分にとらわれず、手柄を立てて自分の価値を少しでも高めようとする時代でした。手柄を立てた領主には褒美として土地を与えなければなりません。領土拡張のため、

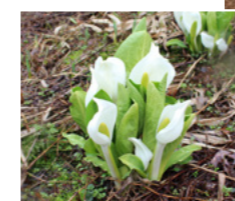
謙信は農閑期の冬場に農民を兵に仕立て、三國峠を越えて関東へ攻め入ったといえるかもしれません。謙信は、本庄氏などの国人領主を武力でおさえ、越後を統一し、戦国大名へのし上がっていったのです。

栃尾城

一行が最初に訪れた栃尾城は、栃尾市街地の西に位置する鶴城山に築かれており、上杉謙信が春日山城に上るまでの青年期を過ごした城郭です。謙信はわずか14歳で中越地方の反乱・暴動を鎮めるため、兄である晴景の命により栃尾城に入りました。そしてこの地で旗揚げをし、数々の武勲を打ちました。その名を全国に轟かせてきました。栃尾城は北に向けて突き出した険しい山稜を利用して築城



4月にもかかわらず、本丸に登る山道には雪が残っていましたが、希望者のみ本丸をめざしました



雪の中で水芭蕉がお出迎え



馬の背状の本丸から栃尾の町を望む

され、その規模は圧倒的に大きく、別名鶴舞城とも呼ばれています。謙信はこの城で6年ほどを過ごし、19歳で生涯の居城として知られる春日山城に入りました。

上杉謙信コンパクトガイド



上杉謙信とは？
「義」の武将と称された戦国時代の猛将
1530~1578年

「軍神」と呼ばれた男

「越後の虎」と呼ばれるほどの風貌があったといわれる謙信公。幼名を虎千代、元服して景虎、出家して法名を謙信と号し、養父である上杉憲政の跡を継いで関東管領職となったのちに、よく知られている上杉謙信と名になりました。生涯で70を超える戦を行った戦国時代の猛将であり、越後に平和な社会を築き上げ、人々に心の安定をもたらしました。生涯一度も越後への敵の侵入を許さなかったとされています。

ビジネスマンとしての一面も

「義の人」と称される上杉謙信ですが、泊・柏崎・直江津の3つの港に出入りする船から関税を取りたてるなど、商業活動も活発に行っていました。「敵に塩を送る」という言葉の語源となった、謙信が宿敵である武田信玄に塩を送ったというエピソードには、塩不足に悩まされていた信玄や領地の人々を助けるという目的に加え、塩がなくなって困っている今なら、日本海産の塩を売りにいけばお金を稼げるという狙いもあったとされています。

村上城



七曲りの登り口で解説を聞く参加者

翌日訪れた村上城は、村上市街の東端に横たわる臥牛山を中核とし、西から北をめぐる平地を広く取り入れ、三面川を北側の守り

新発田城



舞鶴城址の碑がある村上城天守

最後に訪れた新発田城には、「御館の乱」と呼ばれる上杉家の一大争乱が深く関わっています。生前、謙信は正式に後継者を確定していませんでした。謙信の死後、甥にあたる景勝と養子である景虎との間に後継者争いが起きました。これを「御館の乱」といいます。この争いにおいて家臣の新発田重家は景勝側につき、勝



新発田城表門

利に大きく貢献したにもかかわらず、新発田一族には景勝から恩賞が与えられませんでした。これによって両者は対立し、天正9(1581)年から7年間にわたる戦いが起こりました。この戦いで新発田城は陥落し、重家以下は族滅へと追いやられてしまいました。



新発田城 旧二の丸隅櫓
櫓の腰壁は白いつくいに瓦をはめ込んだ海鼠壁で仕上げられている。北国特有の防寒対策でもあるが、デザイン的にも白と黒のコントラストが美しい



珍しい三尾の鯨を載せた三階櫓
日本100名城に選定されている